

十 そんな筈ではなかつたに

他を顧るに及ばぬ、自ら躊躇するに及ばぬ、須らく躬を以て求道の旅に立て、聞法の室に入れ、招喚の聲に徹せよ、大悲の食に飽け、必ずや先づ自己の真相に打當るであらう。此時こそ眞に如來本願の救済に徹底するのである。ベーコンは云ふ。人は獨居の時、激怒の時及び未經驗の事に、其地金を出すものであると。獨居の時は飾らねばならぬと云ふ念なく、激怒の時は平日の嗜みを忘れ、未經驗の事を處するには先例がないからである。此の三つの場合に現はれ出でたる地金、即ち眞の自己とは、云何なものでせう。とてもお話にはなるまい。そんなものを搔繕うて、めでたうしなして往生とは、及びもつかぬ存念。木に竹を接ぐよりか、まだ困難でなからうか。

徳川氏全盛の時、霞ヶ關の黒田侯邸に、三家(尾張紀伊水戸)を初め、諸大名を相招き酒宴の折柄、井伊侯の云はるゝには、「拙者の家來に殊の外接木の上手がござる、何木にも接いで接がぬことはござらぬ」との自慢顔に、剛氣の黒田侯直に「拙者の家來に竹を接ぐ者がござる」と應ぜられたので、一座の大名「それはく珍しきこと哉、是迄接木と申すことは承はり及びたれども、接竹と申すことは承知致さず、さてもく珍しき事かな、その御家來何卒御呼出に相成たし」とあつた。黒田侯も少々當惑の體なれど、負ぬ氣になつて、御次に控へし小姓某を諸大名列座の中へ呼出され、「其方竹を接ぐことを申上ぐべし」との御命。處で某は、是迄竹は勿論木も接いだ事もなく、何とお答申上げんか、此儘退かば主人の御難儀。聊か困らぬでもなかつたが、澄まし込んで一段と改まり「某是迄竹を接ぐ事を相好み、數千本の竹を接ぎ候」と申上げたので、諸大名殊の外感心致され、「我も接いでもらはん、我もく」と詰めかける。某ぬからぬ顔にて「是迄に數千本の竹は接ぎ候

へども、未だ一本も接きたることは之なく候」とやったので、一座大笑となつたといふ。

木に竹は愚か、竹に竹を接ぐことが出来ぬ。凡夫が此儘、佛にならうなど、及びもつかぬことである。煩惱具足必墮無間と頭の上らぬ處に、如來の大悲が徹到して下さる。かくて、獨り居て喜び、激怒に懺悔し、未經驗の事に道開けて、念佛無礙の一道を悠々闊歩するの身となられる。仕合なる哉。